

節目を迎えたセンター試験。 開始から20回！

受験生の多様化、マークシートによる学力判定の限界に、どう対処する

旺文社 教育情報センター 21年2月

受験生にも深刻な影響を及ぼしている急激な景気悪化の下、受験シーズン真っただ中である。先月は、現役生・浪人生等を含め50万7,621人が大学入試センター試験(以下、セ試)を受験。21年セ試は、平成2(1990)年の開始から20回目、前身の共通第1次学力試験(以下、共通1次試験)から30年という、節目に当たる。

この間、セ試は様々な改革・改善がなされ、大学入試において公共性・信頼性のきわめて高い、社会的制度として定着しており、高校教育にも多大な影響を及ぼしている。

最近は私立大の8割を超えるセ試利用入試などで、受験生の多様化が一段と進んでいる。

また、「学力」の要素として、知識・技能の“習得”のほか、思考力・表現力などの“活用能力”の重要性が指摘されている。

マークシート方式のセ試は、こうした受験環境の変化や学力観にどう対処していくのか。



<大学入試の改善とセ試>

大学入試の改善はこれまで、高校と大学との接続の観点から、それぞれの時代の文教施策や社会の要請・批判等を背景に行われてきた。

○ 共通1次試験

昭和40(1965)年代は、受験生数の急増、合格率の低下、難問・奇問の出題など、受験環境の厳しさが社会問題化していた。こうした中、国立大の間で学力試験を第1次試験(客観式)と第2次試験(論述式)とに分け、これらを組み合わせる選抜方法が提唱された。

そこで、高校での学習成果を総合的に判定できるよう5教科7科目(社会、理科各2科目)の客観的な「統一テスト」構想が生まれた。これが共通1次試験へとつながり、昭和54(1979)年1月、第1回共通1次試験が国公立大志願者を対象に実施された。共通1次試験は当初、一律に5教科7科目が課せられた。

○ 共通1次試験からセ試へ

共通1次試験は難問・奇問を排し、良質な出題の確保などの点で評価を得たが、受験が一律に5教科7科目(昭和62(1987)年～平成元(1989)年は5教科5科目が主流)課せられていたことなどから大学の“序列化”が顕在化し、これによる「輪切り」の進路指導が行われたこと、試験の利活用が国公立大のみに留まったことなどが問題視された。こうしたことから、共通1次試験は第11回の平成元年で幕を閉じ、平成2(1990)年からは「大学入試

センター試験」(セ試)に継承された。

○ セ試の改善

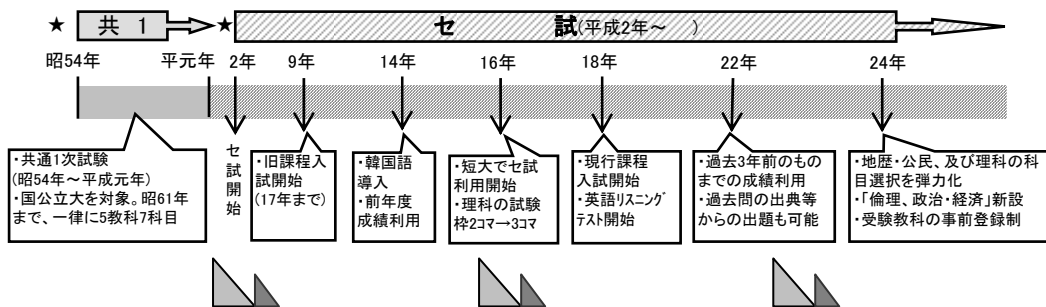
大学入試やセ試の改善については、中教審や旧大学審(現在の中教審大学分科会)の答申、大学側、高校側からの要望・要請など、様々な改善策が提示されてきた。セ試もそうした要請等を踏まえ、様々な改善が図られている。最近の主な改善点をみてみよう。

・14年=外国語に韓国語を導入。セ試の前年度成績利用を導入／
・16年=短大でセ試利用開始。理科の試験枠を2コマ→3コマに変更／
・18年=新課程(現行課程)入試に伴う出題教科・科目の変更(6教科32科目→6教科28科目)。英語にリスニングテストを導入。時間割の変更(第1日目:文系科目、第2日目:理系科目)

また、20年には、22年以降の次のような改善策が発表された。

- ◎ 22年以降=①当該年度の入試において、過去3年前のものまでのセ試成績の利用を認める／②過去問の出典や教科書の掲載文からの出題も可能に
- ◎ 24年以降=①地理歴史・公民の科目選択の弾力化:地理歴史と公民の試験枠を統合し、地理歴史・公民から最大2科目の選択を可能に／②出題科目に「倫理、政治・経済」を新設／③理科の科目選択の弾力化:現行のグループ制(3つの試験枠)を廃止し、理科6科目から最大2科目の選択を可能に／④受験教科の事前登録制を採用

●セ試の変遷と主な改善等



<多様化する受験者層>

セ試は、国公立のすべての大学と短大が利用することができる。また、大学・学部の序列化を防ぐために、一律に結果(受験者の得点)を比べられないよう、受験教科・科目を各大学(学部)の自由に任せるアラカルト方式を採用し、入試の多様化にも寄与している。

セ試は現在、すべての国公立大、及び私立大の約85%(21年の大学ベース)で利用している。私立大のセ試利用入試は、国公立大との併願が多い一部の難関・上位校を除き、3科目以下の受験が一般的である。また、最近では私立大の志願者獲得策の一つとして、セ試利用のバリエーションを拡大したセ試利用入試の“複線化”も盛んだ。

他方、高校教育の多様化の進展、大学進学率の向上などに伴い、専門学科(専門高校)生などのセ試受験も増加している。

こうしたことから、セ試の受験者層は、短大の途中参加もあり、開始当初に比べ多様化の様相を一段と強めている。

○ 多様化への対応: 同一科目における難易差別の出題

現行の6教科28科目からなるセ試は、同一科目における難易差はなく、すべての科目が1

種類の問題である。前述のように、受験者が多様化しているのに対し、出題レベルは単一であるため、セ試の目的や機能が十分に生かされていないとの指摘もある。

セ試の出題に当たっては、平均得点率60%程度の難易レベルを目標に、学習指導要領の範囲内で出題される。セ試は、大学入学志願者の高校段階における基礎的な学習の達成度を判定することを主な目的としていることから、基本的には教科書レベルの出題となっている。

そのため、国公立大を中心とした一部の有力大(学部)では、セ試受験者の多くが高い得点、特に数学や理科では満点近くの高得点も少なくなく、学力判定や入学者選抜のための機能を十分に果たせず、大学入学のための“資格試験的”な活用として、「第一段階選抜」にのみ用いているところもみられる。

他方、出題者側も制約された平均得点率や出題範囲の中で、平均点を一定程度に保つために、出題する問題量(解答数、掲載文、語数、資料など)や計算量(繁雑さ)などで平均点を調整しているようにもうかがえる。特に、数学や理科では、計算力が決め手となったり、英語(筆記)では長文の速読即解がポイントになったりと、セ試は問題の“量”と解答の“時間”との勝負である、との評をしばしば耳にする。

こうした課題を解消し、深みのある問題をじっくり考えさせる時間をもたせ、受験生の多様化にも対応できる一つの方策として、同一科目に難易差別の出題を設けてはどうか。

すべての科目を難易差別に出題することは現実的でないため、基幹科目の国語、数学(数学Ⅰ・A/数学Ⅱ・B)、英語(筆記/リスニングテスト)のほか、受験者の比較的多い地理歴史(世界史B/日本史B/地理B)、公民(現代社会)、理科(物理Ⅰ/化学Ⅰ/生物Ⅰ)に限って、各科目2~3種類の難易差別の出題としてはどうか。

なお、現在、地理歴史では世界史A、世界史B/日本史A、日本史B/地理A、地理Bの6科目から出題されているが、各A科目(2単位)、B科目(4単位)は標準的な履修単位数の違いによるもので、出題レベルの難易差によるものではない。

国公立の各大学(学部)は、自らのアドミッション・ポリシーに基づいてセ試の受験科目と出題レベルを受験生に明示することができ、セ試のいっそう有意な活用とともに、大学の機能的分化にもつながろう。

<マークシート方式の限界>

セ試のもう一つの課題として、出題形式がある。現行では記述式の設問はなく、設問に対する選択肢の中から受験生が正解とする数字や英字、記号を選び、それを解答用紙(マークシート)の問題番号に対応した解答欄にマークする(塗りつぶす)。

○ 数学の出題：

例えば、数学では多くの場合、マークシート方式による制約から、予め決められた解法(手順、誘導)に沿って解答することで部分的に得点を積み上げていくため、受験生独自の発想による解法は評価されない。数学では、答えは一つでも解法は複数あり、それを見出すことが重要である。しかし、マークシート方式では、そうした能力をみるのに限界がある。

また、計算結果を設問中の“穴埋め”に沿ってマークしていくことも多く、その場合、穴埋めの枠内に記された設問記号の数や位置などで、答え(数値)の桁数や数字(文字式の頭に

は0や1を記さない)が予測されることもある。

○ マークシート方式と学力判定

セ試は、50万人以上の答案をごく限られた短時間のうちに正確、公正に採点しなくてはならず、マークシート方式を採用しているが、基本的な問題点が指摘されている。

先の学習指導要領等の改善に係る中教審答申(20年1月)では、「学力」の重要な要素として、①基礎的・基本的な知識・技能の習得／②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等／③学習意欲、の3点が明確化された。

マークシート方式では、このうち、①の「知識・技能の習得」の判定が主体となり、②の「思考力・判断力・表現力等」の活用力の判定は難しい。

その結果、マークシート方式は、「深く考える人間を育てない」「思考(過程)を飛ばして、結論(結果)だけをみる人間を育てる」「○×人間を育成」「詰め込み型、暗記型学習を助長」などと、酷評されてきた。

こうした学力観も踏まえ、小学6年生・中3年生を対象に19年度から実施されている国(文科省)の「全国学力・学習状況調査」では、国語／算数、数学において、①主として「知識」に関する問題、②主として「活用」に関する問題を記述式も含めて出題し、約220万人分の解答用紙を電子技術を駆使して採点・処理、分析している。

○ 言語力の育成：数学での題意の読み取り

上記ではセ試の出題形式の現状や課題について述べたが、出題内容については、出題者の大変な努力によって信頼度のきわめて高い良問であるとして評価されている。

ところで、言語活動の充実、言語力の育成については、小・中・高校を通じ、各教科を貫く重要な改善事項であることが、前記の学習指導要領に関する中教審答申で提言されている。

これに関連して、今年度のセ試の数学I・Aに、この言語力をみるのに相応しい問題が出題されたので、その一部を紹介する。

<数学I・A> 第4問

さいころを繰り返し投げ、出た目の数を加えていく。その合計が4以上になったところで投げることを終了する。

(1) 1の目が出たところで終了する目の出方は 通りである。

2の目が出たところで終了する目の出方は 通りである。

3の目が出たところで終了する目の出方は 通りである。

4の目が出たところで終了する目の出方は 通りである。 注.(2)は省略。

この問題は「場合の数」の領域からの出題であり、一見したところ、日ごろ高校数学に接していない者でも簡単に解けそうな問題である。しかし、設問の“題意”を正確に読み解かないと失敗する。つまり、「目の合計が4以上(いくつでも)になってもよい」／「目の合計が3以下は、さいころを投げ続ける」の2点を読み取ることがポイントのようだ。

ちなみに、それぞれの目の出方は、次のようになる。

ア：1→1→1→1／1→2→1／2→1→1／3→1の4通り。

イ：上記アの最後の目の数を2に変えた、1→1→1→2／1→2→2／2→1→2／3→2(4通り)

と、 $1 \rightarrow 1 \rightarrow 2 / 2 \rightarrow 2$ (2通り)の合計、6通り。

ウ：上記イの最後の目の数を3に変えた、 $1 \rightarrow 1 \rightarrow 1 \rightarrow 3 / 1 \rightarrow 2 \rightarrow 3 / 2 \rightarrow 1 \rightarrow 3 / 3 \rightarrow 3 / 1 \rightarrow 1 \rightarrow 3 / 2 \rightarrow 3$ (6通り)と、 $1 \rightarrow 3$ (1通り)の合計、7通り。

エ：上記ウの最後の目の数を4に変えた、 $1 \rightarrow 1 \rightarrow 1 \rightarrow 4 / 1 \rightarrow 2 \rightarrow 4 / 2 \rightarrow 1 \rightarrow 4 / 3 \rightarrow 4 / 1 \rightarrow 1 \rightarrow 4 / 2 \rightarrow 4 / 1 \rightarrow 4$ (7通り)と、いきなり4(1通り)の合計、8通り。

まさに、数学において言語力をみる良問といえよう。

<記述式問題への期待>

共通1次試験から30年、セ試開始から19年たち、教育環境や学力観、受験環境などが大きく変化している。現行セ試の出題レベルや出題形式について、その現状や課題などをみてきたが、セ試もそれらについてのシステム改革が必要となってきたのではないかと。

○ 大学入試の選抜方法

国公立大の一般入試では、マークシート方式のセ試と、記述式の個別試験とを組み合わせで入学者の選抜を行うことを基本としている。

国公立大のセ試「5(6)教科7科目化」(16年から導入)は、こうした選抜方法において、高校教育における基礎的・普遍的な学習の達成度を測る上で、少なくともこれだけの教科・科目を受験生に課す必要があるとの考えに立つものである。そして、個別試験において、マークシート方式によるセ試の限界を補い、評価尺度の多元化を図るべく、記述式の学科試験や小論文、総合問題、面接などが実施されている。しかし、募集人員の多い一般入試の前期試験でも個別試験(学科試験)は1~3教科が多く、後期試験では学科試験を課すところが少なく、セ試主体となっている。また、最近では小論文や総合問題などの減少傾向もみられる。

他方、大学入学者の8割近くを占める私立大(20年度私立大入学者割合：78.6%)の個別試験においても、多くが3科目主体の多肢選択式や短答式の問題である。

○ セ試の出題形式の改善

上記のような大学入試の現状を鑑み、セ試の出題形式については、アメリカの大学進学のための統一テストであるSAT(Scholastic Assessment Test:教育評価テスト)などを参考に、まず、部分的にでも記述式問題の採用を検討してはどうか。

例えば、基幹科目の数学や英語(筆記)、国語などに「空所補充問題」(短答式：数値や数式、記号、文字、短文、英単語・語句などの補充、記載)を取り入れるだけでも受験生の学力をより多面的に判定することができる。論述・論証問題は、採点・処理の手間や時間的な問題点から、将来、文系・理系の「総合問題」として秋期に行い、他の教科・科目は現行どおり1月に行ってはどうか。記述式問題の採点については電子技術を活用するとともに、十分なセキュリティの下で大学側の他、高校側や教育委員会などにも協力、支援してもらう。

ここで述べたセ試同一科目の難易差別出題や出題形式についての改善策は、高校、大学双方にとっての学力向上につながり、強いては教育における“公共財”にもなり得る。さらに、現在検討が進められている「高大接続テスト(仮称)」とも十分連携することで、高大接続の観点からの相乗効果も狙うことができるのではないかと。(2009. 02. 大塚)